
刊行にあたって

本書は、平成5・6年度に本館考古研究部が実施した「国産紀年銘土器・陶磁器データ集成」事業の成果である。本事業の一環として整理を進めた近世陶磁の生産地情報は、「近世窯業遺跡データ集成」（本館研究報告第73集）として平成9年度に刊行されているので、本書とあわせ当該事業は一応完結したことになる。

紀年銘陶磁について、戦前より備前窯をはじめいわゆる六古窯で注視されてきたが、特殊な鑑賞陶磁として取り扱われることが多かったため、銘文の内容の吟味はほとんどなされなかった。戦後は、1980年代以降、肥前、瀬戸・美濃を中心とする窯業遺跡、および近世都市遺跡の発掘調査の進展によって莫大なモノ資料が集積されると、編年軸の定点資料として重視されるようになった。小木一良『伊万里の変遷』（1988）、美濃古窯研究会「美濃焼紀年銘資料リスト」『美濃の古陶』7（1994）はそうした要請に応じたものであった。

ところで、今回の紀年銘陶磁の集成は、モノ資料と文字史料の接点を探ることで、新たに広義の歴史学の構築を目指す本館の研究活動に資するべく企画されたが、社寺への寄進物を主体とする詭物が大半を占め、特定の高級陶磁生産窯やいわゆる庭焼などのブランド品、個人用の文房具類などがこれにつき、宗教・茶・文房具など特殊器種が目立つため、肥前系陶磁以外は消費遺跡で大量に出土する碗皿類の編年基準資料として一般化しにくい面がある。しかし、銘文に記された寄進主体と寄進先、産地や陶房・陶工などの情報は、沈黙資料としての陶磁器活用の幅を固有名詞をもった社会史の領域まで広げ、今後各地で箱書銘の収集が進めば、在地社会の生活史、あるいは個人の嗜好品として片づけられやすい庭焼や文房具も、時代を語る文化史の資料として評価できると思われる。その意味で、紀年銘の多面的な解明は、本書第Ⅱ部に収録された論説によって、ようやく緒についたばかりといってよい。しかも一方で、紀年銘陶磁は陶芸・美術の世界を流転しているものも多く、基本的な銘文の釈読についても今後各地での追試が必要な個体が少なくないと考えられ、近世考古学の方法で資料化するのに多大の困難を伴うという現実がある。

ともあれ、刊行に至るまで公私ご繁忙のなか都道府県別のデータ整理にとり組んでいただいた研究分担者、銘文の解説にご協力いただいた本館歴史研究部教員、ならびに写真・図版の掲載に協力された関係各位に、深甚なる謝意を表する。

1999年10月

国立歴史民俗博物館 考古学研究部

吉岡康暢
